

ア！ 安全・快速街づくりニュース

「地震で堤防が破れた時あなたならどうします」

～西新小岩地区住民への説明会～

8月10日（木）15時から上平井集会所で地元町会と開催

NHKが取材「NHKスペシャル」（9月1日）で放映

8月10日、葛飾区西新小岩3～5丁目の皆さんを対象に、「地震で堤防が破れた時」と題する説明会が当NPOと地元町会共催で開催されました。

会場の上平井集会所（西新小岩三丁目）には、平日の午後3時開会にもかかわらず、地元住民の皆さん40名余りが集まり、会場に入りきれず、扉の外から聞かれる方も出るほどの盛況でした。

説明会は地元三丁目町会長の鈴木さんの挨拶で始まり、昨年のNPOによる水位表示板の設置に引き続き、葛飾区が水位表示板を追加設置することになったと報告されました。

次いで、先に当NPOが内閣官房都市再生本部の委託を受けて開発した「水害・地震水害対策支援システム・市民の安全を守る君」について、開発を担当された東京大学の加藤先生から説明がありました。

このシステムは、従来都市防災で欠けていた「地震水害から如何にして市民を守るか」という視点から開発されたもので、更に分かりやすいシステムに発展させて行きたいとの発言がありました。

その後、当日のメインテーマである「地震で堤防が破れた時」と題し当NPOの石川理事長の講演が行われました。（内容は本ニュースP.2に掲載）

最後に当NPOの徳倉副理事長から広域避難場所である新小岩公園は、今のままで安全な避難場所とはいえない。このため、スーパー堤防化し、上部は公園・運動場、その下に駐車場を設け、また、南北に抜けられる道路を設けることで安全な防災拠点とすることを考えている。構想が纏まり次第皆さんにも提示し、賛同される方々とその実現を働きかけていきたいとの発言があつてこの会は成功裏に終了しました。

なお、当日は、NHKが会の模様を取材し、9月1日午後10時からの総合テレビ「NHKスペシャル」で放映されました。

この番組は、50分間の防災の日の特集番組です。「首都圏直下型地震の見過ごされてきた視点」として3つの問題を取り上げ、その中の一つとして「海拔0メートル地帯における地震水害の問題」に注意を喚起し、このテーマに関連して当NPOの活動が取材されたものです。 （当NPO事務局長 宇賀俊夫）



上平井集会所に地元の皆さんが多数参加して盛況裏に終了（後方はNHK取材班）

「地震で堤防が破れた時」

当NPO石川理事長の講演

8月10日、上平井集会所で開催された説明会で石川理事長が「地震で堤防が破れた時」と題し講演を行いました。講演の概要をご紹介します。

<防災対策について>

- ◇ 皆さんの住んでいる所は、地下水の汲み上げによる地盤沈下のため、いまや海拔マイナス2~3mの土地になっていること、今は関東大震災級の地震にも耐えられる堤防に守られているとはいえ、もしこの堤防が無かったら干潮になってもお魚さんが泳ぐところに住んでいるということを認識していただく必要があります。
- ◇ 防災対策というものは、過去の災害を教訓として、同じような災害が起こったとしても、それに耐えられるような改良が常に行われています。
- ◇ しかしながら、人間のやることは常に「死角」があります。特に直下型の地震では「想定外」のことが起こるのは、阪神・淡路大震災で高速道路が倒れたり、古くは新潟地震の際、液状化現象で4階建ての鉄筋コンクリートのアパートが土台ごと倒れたことからも明らかです。
- ◇ この地も安全な堤防に囲まれているからといって安心せず、万一堤防が破れたときに備えて、常に避難の準備をしておくことが必要です。
- ◇ 当NPOは、災害時の避難の手助けとなる「市民の安全を守る君」を開発しました。地震水害の場合には、まず「生きているだけで丸儲け」と考え避難することが第一です。
- ◇ このためには、避難するための道路はどうなっているか、公共の建物や公園、民間の高い建物等避難できそうな場所はどこにあるのか、そこにはどれだけの人が避難できるのか、災害弱者としてのお年寄りの避難は可能なのか等自分たちの置かれている環境を知っておくことが必要です。

<「市民の安全を守る君」について>

- ◇ 「市民の安全を守る君」は、避難のために必要な情報をデータベース化した後、浸水シミュレーションを行いました。ある地点で浸水が始まるとすると、その後時間の経過と共に浸水地域がどのように拡がっていくのかを表示しています。
- ◇ しかし、現在のデータは、荒川下流河川事務所から提供された洪水によるオーバーフローの水の拡散状況を表したものであり、地震による堤防決壊時の浸水区域の広がりについては、今後の研究が待たれます。

<新小岩公園のスーパー堤防化について>

- ◇ 新たな避難場所として、例えば中川左岸の上平井橋付近（通称七曲り下流部）がスーパー堤防化された場合には、その地域の避難人口に対し、それを収容する人口が上回るようになる等のモデルケースが示されています。
- ◇ スーパー堤防による「現代の輪中堤」が出来上がれば、一層安全な街となりますが、そのためには住民の皆さんの協力と共に莫大なお金と時間がかかります。
- ◇ このため、第一段階として新小岩公園をスーパー堤防化し、そこを防災拠点として、一時避難の中継基地とすることが考えられます。
更に、もっと身近な避難場所として、今後建設される新築ビルには、より広い廊下やエレベーターホール、子供達のプレイルームや談話室を設けさせ、それを緊急時の避難場所に当てることが考えられます。その見返りに、その部分の面積を容積率から除外したり、建物全体の容積率に特例を設けることで建設費の増加をカバーさせる等の方策がとられることが期待されます。
- ◇ 皆さんが常日頃から集まって意見を出し合い、みんなで自分たちの避難の方法を考え出してください。
追ってこのためのワークショップを開催したり、話し合いのための基礎データを提供していきたい思います。

NHKが当NPOを取材

NHKは、9月1日防災の日の特集番組を制作するため、当NPOの活動を取材しました。

石川理事長のインタビュー、7月19日の事務局会議の模様、8月10日に行われた西新小岩3~5丁目住民の皆さんに対する説明会、昨年設置した水位表示板、中川堤防（通称七曲り）上平井橋付近の住民の皆さんの見回りの様子等の取材が長時間にわたり行われました。

この番組は、「首都圏直下型地震の見過ごされてきた視点」として、「倒壊するマンション」、「住宅地の大規模崩落」、「浸水する市街地」の3つの問題を取り上げました。

「浸水する市街地」では、地震水害の問題を液状化による堤防沈下を中心にして、当NPOが取材された内容を含め10分程度に編集され放映されました

9月1日放送 NHKスペシャル 「首都圏直下型地震の見過ご されてきた視点」を見た感想

● 深見祐弘（江戸川区松島3丁目）

通称七曲りだけで、江戸川区が少しも出てこなかったのは残念。下流の中川放水路の方も取り上げてもらいたかった。

北小岩の方では、スーパー堤防の話が進んでいると聞いている。両区を取り囲むという意味で、既に完成している平井七丁目北地区についてPRしてもらいたかった。

● 富山 心（江戸川区松島4丁目）

地盤沈下は天災にあらず人災。天も味方せず、地も害を為すは昔からの習い。恨みを反省となし、自らの責任とし、天地ともに味方とし、住民挙げて被害無きを祈り、協力し、努力し、運動し、対策を明確にし、行動に移そう。

● 筒井 一（さいたま市浦和区）

小生の団地も遊水池の埋立地であり、無関係ではありません。1年前のカトリーナの事故も橋桁の一斉崩落が残映としては最も強烈ですが、大災害の直接の原因はごく一部の堤防の決壊です。

番組でいえば、中川堤防の2箇所の決壊が、近くでは直ちに10mの冠水に及びも、時間とともに百万人を超える人にも被害が広がる。それが10年後に工事が完成するまでその危機が残るという点ではないでしょうか。

番組では触れていませんでしたが、その対策はどうなっているのでしょうか。

● 磯間 秀安（西新小岩四丁目）

去る8月10日に、西新小岩3丁目集会所にて、NPO法人「ア！安全・快適街づくり」の方々から地域における大規模自然災害の恐ろしさについてお話を聞き大変参考になりました。

当地域は、川に囲まれ、堤防の決壊による水害や地盤の液状化による建物の倒壊など、地震災害の恐ろしさを地域の人達も再認識したと思います。

これからは、安全に避難する場所や避難のための物資の確保、高齢者の所在等を地域の人達と確認し、何時起こるか判らない災害に備える危機意識を高めていきたいと思います。

石原知事記者会見

（平成18年度9月8日）

「ゼロメートル地帯の堤防等の震災対策」について知事が発言された内容を要約してご紹介します。（詳細は都庁のホームページをご覧下さい。）

先週の9月1日の防災の日には、都が中心となって大規模な訓練を行いました。

同じ日の夜のNHKで防災に関する特別番組があり、震災時の液状化現象により堤防が崩壊してゼロメートル地帯が浸水する可能性があると報じられていました。

これを見ますと非常に多くの都民の方々が不安になられると思いました。実情を調べましたが、その心配は今のところ無いとは言い切れません。

最悪の場合は、阪神・淡路大震災並みの地震が来て、たまたまその発災時に月のめぐりが大潮で、一番潮位の高い高潮の時です。

そういう場合を想定してテレビは報道していました。そうなってくると、ちょっと今の態勢では、まだまだ防ぎきれないことがあるのかも知らないけど、まずそういう2つのものが重なって起こる確率は非常に少ない訳です。

ですから通常考えられる最悪の事態に備えて、東京では戦後からやっていますが、いわゆる液状化が起ころる危険性は、（パネルを指して）この茶色い線の中の要するにゼロメートル地帯ですけれども、それをめぐる河川についての対策は、黒い部分は全部済んでいるんです。

この間指摘されたこの部分は七曲という既存の河川（中川の一部）です。これを河野一郎建設大臣の時に思い切って新中川につないだんだけど、中川のここに水門がありまして、この水門は5mまでの高潮を防げるわけです。

それ以前の状況においては一番危ないだろうという点を越えた、これだけの護岸補強は行っています。この残っている部分についても、これから液状化を防ぐ工事を進めていきます。

東京のゼロメートル地帯は、面積124平方KMで、145万人が住んでおられます。

このゼロメートル地帯を海面や隅田川などの大河川から守る外郭堤防については、阪神・淡路大震災の知見を踏まえまして、耐震化を進めてきました。このように外郭の堤防は、ほとんど完成していますけど、さらに万全を期すために、内側の堤防や水門の震災対策も、今後速やかに完了させるように取り組んでまいります。

「地震で堤防が破れた時」の説明会を聞いて

中川 荣久（東新小岩七丁目町会長）

石川理事長の話を聞いて、私の体に衝撃が走りました。結論は最後に書くのですが、最初に結論を書かずにはいられません

地震で堤防が決壊してしまう可能性、決壊してしまったら5メートル近くの水が押し寄せてくる事を、0メートルいやマイナスメートル地帯に住んでいる人々に、この事実を一刻も早く知らせることが急務であるとの結論に達したのです。

話の中にありました中川左岸堤防の決壊の事ですが、必ず有りうると思います。机上計算以上の大きな力が加われば（過去のデーターより計算）決壊してしまうでしょう。

昭和39年に起きた新潟地震の際には、横方向振幅が40センチメートルから45センチメートルとして（過去の地震データーより）設計された昭和大橋が無残にも落ちてしまった事は衆知の通りです。

地震直後、新潟市内に私はいたのですが、第1回発表では振幅60cm、その後90cmと発表され、まさに計算以上の力が加わった実例です。

又、新潟地震以降に液状化問題が表面化し、液状化により信濃川右岸の堤防が流失したことを参考に、以後構築された堤防等は液状化対策が講じられているようです。しかし、中川左岸上平井水門より下流の立派な堤防も、伊勢湾台風時の高潮に耐えるものではありませんが、新潟地震以前の設計で、液状化対策は考慮されておりません。

まして、上平井水門の上流、通称中川の七曲左岸及び新中川右岸の堤防は、中川左岸下流の堤防に比較し

て、あまりにも小さく、勿論、液状化対策も考慮されておりません。

堤防がこの様な状態の時に、東京湾北部を震源とする大地震が発生すれば、中川、新中川の堤防は100%決壊する恐れがあると思います。

石川理事長のお話とスライドの説明をお聞きして、当地区には、いかに避難場所が少ないか、3階以上の建築物が少ないので驚きました。

新小岩駅周辺はまだ良いのですが、駅より離れるに従い、避難場所が少なくなることが良くわかりました。

お話の中にありました中川左岸決壊シミュレーションを見ますと、10数分以内に避難しなければならない事も良くわかりました。

避難するためには、避難場所を確保しておかねばなりません。しかし、いま区が広域避難場所に指定している新小岩公園は、浸水災害の場合は水没します。これでは避難場所にはなりません。一刻も早く嵩上げによる水没の無い避難場所が実現するよう願うものです。

当NPO法人が取り組んでいるスーパー堤防は、全体が完成して輪中堤にならなくとも、部分的に出来上がれば、緊急避難場所として確保できることが、中川左岸決壊シミュレーションを見て聞いて大変良く理解できました。

前記のスーパー堤防構築、新小岩公園の嵩上げは、一時避難場所として数十万人の生命を守るために、地元に住んでいる我々一人一人が努力して1日も早く実現しなければならないことを痛感しました。



七曲り堤防視察をNHKが取材

阪神・淡路大震災体験記

嶺山嘉孝（嶺山保険事務所）

この体験記は、当NPOの会員で、タカダ保険事務所を経営されている高田信一さんのご尽力により、兵庫県損害保険代理業協会により編纂・発行された「阪神淡路大震災の教訓」に掲載された嶺山嘉孝さんの手記を要約してご紹介するものです。

地震発生時、私は家族と共に自宅で就寝中だった。突然ドーンという音の後にグラグラと揺れて、何があったのか訳の分からぬ状態だった。

恐らく、車が家に突っ込んできたのだと思い、家族の安否を確認した上で外へ出てみた。すると、斜め前の家がペシャンコに潰れ、傾いてしまっている家も数軒ある。

だが、それ程の地震が発生したのだということがすぐには認識できなかった。（まさか、自分がこんな大災害にあうとは…）

その後、付近で火災が発生、周囲の家はほとんど焼失、我が家もその中の一軒であった。

当時は、とにかく全く何をしたら良いのか分からぬ状態であった。一時避難場所は寒く、そこからさらに避難するため大阪に住む親戚の家を目指した。

最初に保険会社へ顔を出し、満期書類・資料・顧客ファイル等を全て焼失したことを報告、保険会社側からは業務・物資等の支援の約束をいただき、出社していた社員さんからの暖かい励ましの言葉に見送られ会社を後にした。

この日はせっかく神戸に戻ってきたものの、長く留まっていることはできなかった。とにかく、家族の避難地である大阪との往復に何時間かかるか予測できない状態だったので。何日かそれを繰り返したが、体力の限界を感じたので神戸長田区にマンションを借り、そこを拠点に自宅の片付けと業務の再開を目指すことにした。

久しぶりに、全焼したとはいえ自宅に戻ったのだが、そこで初めて自宅車庫がコンクリートに囲まれていたため、焼損を逃れたことが分かった。

シャッターをこじ開け中を覗くとヘットライトの横に熱による少しのただれがあるものの無事な愛車が姿を見せてくれた。これには思わず涙ぐんでしまった。そこで、この車庫を片付け、そこを事務所とし、やつ

と落ち着くことが出来た。

思い起こすと、震災当時、我が家が燃えているのをジッと見ていると、隣に消防士が立ちすくんでいる。私は思わず「あれを消してくれ！」と叫んでいた。

彼は涙ぐんでこう返した。「俺も消したいんだけど水が無いんだ」。きっとあの消防士も悔しかったのだ。悪いことをしたと反省した。

全焼した自宅、そのガレージの中の車をあきらめていたので、家族ごと徒步となつたが、その途上の様子の余りのひどさに驚いた。行き交う人達から、西宮までの交通機関は何もないと聞かされたのだが、ともかく西宮を目指した。

西宮からは阪急電車が運行されていてようやく大阪へたどり着くことができたのだが、着いてみて驚いた。ネオンは煌々と輝き、行き交う人々は普段のまま、お店には人が出入りし、僅か30分程の違いであるで別世界のようだった。

親戚の家で、二人の子供たちが風呂に入れてもらい「温かいよう」の声が聞こえたとき、大変だったがようやく大阪まで来て避難できたことを実感した。

家族の安全は確保できたものの、それからが大変だった。まず西宮の妻の両親の安全を確認し、仕事の拠点である神戸へ向かった。

家庭の防災については色々あるとは思う。火災に限れば、火災保険と地震保険はセットで付けるべきだろう。しかしながら難しい問題がある。

この不況の中（被災地神戸阪神においては、いまだにこの景気概況である）、お客様の収入状況は未だに芳しくない。地震保険を付けたくても付けられない状況がある。お金持ちにしかしっかりと保険で身を守ることができないなんて、不思議な世の中である。しかし、それにもめげず地震保険の説明だけは欠かさないようにしようと思っている。

安心 安全のまちづくりは事実認識から ——江戸川区における潮位表示の取り組み——

江戸川区土木部計画課長 高井 聖

7割が海平面下で、堤防が無ければ水没してしまう江戸川区、これまで水害との闘いの中で、どれ程の犠牲を払い資産を投じてきたことか。

少々の大雨でも被害がなくなったのは、つい最近のことである。しかし、その対策も人知の及ぶ範囲に過ぎない。いつ、今まで経験したことの無い大水害に見舞われるか分からぬ。

しかもその危機は、日増しに現実のものになってきている。その備えの決め手になるのが、スーパー堤防である。

区ではこの事業推進のため、今年度から課も新設し、精力的に地元行脚に乗り出したところである。

しかし、事業には長い年月と莫大な経費を要し何より沿川住民の理解と協力が無ければ成就しない。そのためには、ただ必要性を訴えるだけでなく、日々の暮らしの中で自然に必要性を浸透させていく取り組みもあわせて必要である。

そこで、昨年から始めたのが、現在住んでいる街が海面より低く、常に洪水の危険に晒されていることが一目瞭然で理解できる「潮位表示」である。今年度は、この取り組みを本格化させ、区内全域に配置する予定である。

設置場所は、地域に最も馴染みがあり教育効果も期待できる小中学校の校舎の壁。主要な公園に設置済みの防災無線の柱。そして、各事務所など百数十箇所に及び。

「観測史上最大の豪雨と未曾有の被害」が各地で多発し、大地震を含め、地球規模で頻発し始めている。例外など有りえないのである。

一刻も早く、最も危険な所に暮らしていることを、区民に認識してもらわなければならない。

この取り組みにより、区民が迫りくる危機を我が事として受け止め、その反響を手がかりに、事業推進の機運を盛り上げていけばと考えている。

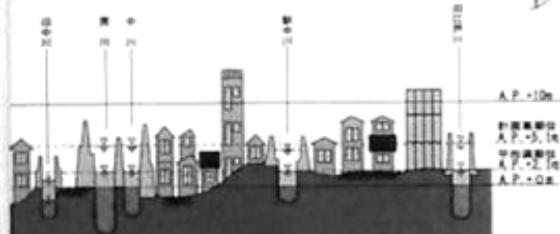


校舎の壁に設置された潮位表示

堤防は、高潮や津波、洪水からまちを守ります

江戸川区は、かつて洪水や高潮、さらに大雨による水害を被ってきましたが、堤防や水門、下水道の整備により近年においては、大水害が防止されるようになりました。

しかし、豪雨による河川の増水で、一度堤防が決壊してしまうと海面より低い地域が7割もある江戸川区では、大洪水となってしまいます。



区内の横断面図



区内地勢

この学校付近の中川の堤防の高さです A.P.+7.1 m

洪水や高潮については堤防で守られています。

高潮対策の基準潮位 A.P.+5.1m

昭和34年9月名古屋地方に最大の被害をもたらした伊勢湾台風と同程度の台風が最悪のコースで襲来した場合を想定した高潮の潮位です。

キティ台風の最高潮位 A.P.+3.15m

昭和24年8月この台風により高潮を発生させ、区内に甚大な被害をもたらしました。

大潮の満潮位 A.P.+2.10m

大潮とは潮の干満の大きい状態で、新月や満月の前後数日間のことです。

大潮の干潮位 A.P.±0m

A.P. (Arakawa Pell の略) とは隅田川の河口近く豊岸島のあった量水標の零位を基準とした水位表記で、明治6年に荒川水系の水位を測るために設置されたものです。概ね A.P.±0 は大潮の干潮位になります。

この学校のグランドの高さは A.P.-0.3m です。

潮位表示の説明板

防災拠点 白鬚西地区見学会報告

当NPOでは災害に強い街づくりの事例として、去る9月28日（木）に東京都が建設した防災拠点「白鬚西地区」を見学しました。

当日はJR南千住の駅前にNPOの会員と葛飾区、江戸川区の住民合わせて25名が参集しました。

この事業は、木造住宅が密集した地域の細分化された宅地を統合して不燃化した中高層共同建築物を建築するとともに、公園、緑地、道路などの公共施設を一体的総合的に整備する事業です。

白鬚西地区は、昭和44年11月に策定された「江東再開発基本構想」の防災6拠点の1つに位置付けられて整備を進めてきました。

この地区は、隅田川沿いの汐入という江戸時代からの集落とユニチカ、鐘紡などの紡績会社の跡地で、東京都が買収しました。

最初に見学者は、これらの施設の全貌を俯瞰するために、この地域の西側に位置する32階建のトミンタワーの屋上に昇りました。

当日は絶好の天気となり、素晴らしい眺望に参加者から感嘆の声が上がりました。

ここで東京都再開発事務所の吉田課長、鈴木さん、清水さんから事業区域内の各施設の説明がありました。

汐入地区の住民が入居した建物や当該地区へのアクセスのための隅田川にかかる水神大橋・千住汐入大橋・蛇行している隅田川のスーパー堤防、さらに整備された避難広場等の説明を受けました。

次に屋上から降りて白鬚西地区事務所で各種図面等により事業の推移や汐入地区的用地買収また胡縁神社や石浜神社の移転、さらに造船所の収用等難航案件の説明を受けました。

この説明によると、事業は基本構想以来36年間の歳月と340回にわたる地元協議を行って今年の2月に完成したことでした。

その後、隅田川の堤防と汐入公園をスーパー堤防として一体的に整備した水と緑の豊かな広場を散策するなど、東京都の防災事業の充実さをつぶさに見学しました。

最後に防災拠点として避難広場、バーベキュウ広場（焼き出し場）、災害用トイレ等の見学を終え、再開発ビルを背景に記念撮影をして、16時30分頃、2時間30分にわたる見学会を終了しました。

参加者は、充実した防災拠点の施設の一つ一つに感心し、安全で快適な街づくりの必要性を感じながら三々五々散会しました。再開発事務所の皆さん有難う御座いました。
(飯山鉄之助・伊藤浩之)



トミンタワー（21階建）の屋上から白鬚西地区スーパー堤防の全景を見る



東京都再開発事務所の吉田課長等から再開発事業の説明を受ける



スーパー堤防に記念に保存されたコンクリート護岸の一部

～議会の論議～

葛飾区議会及び都議会の質疑から当NPOの活動に関する内容を要約してご紹介します。

◇ 葛 飾 区 議 会 ・・・米山真吾議員の質疑（平成18年6月）・・・

●中川七曲堤防の震災対策について

新小岩・奥戸地域はゼロメートル地帯、それを守っているのが中川の七曲カミソリ型堤防です。

この堤防は、関東大震災クラスの揺れがきても耐えられる設計にされているとのことです、阪神・淡路大震災でも護岸が崩壊する事例がありました。

崩壊の原因は、揺れではなく液状化による沈下崩壊にあるとされています。

早稲田大学部が東京湾北部地震を想定してシミュレーションしたところ、中川七曲堤防の杭の先端まで液状化が起り、カミソリ型堤防が沈下崩壊する可能性があるとの報告がなされております。

沈下崩壊すると堤防を支えていた杭が折れたり、ずれたりしてしまい、堤防が傾きだします。

そうすると岸辺を固めていた一部の堤防の異変で周辺の地盤が川に吸い寄せられて行き、街並みごと動く、いわゆる側方流動という現象が起ります。

その際に起る最大沈下量は、2.9mに及ぶと想定されております。多くの建物が重さで沈んでしまうことになります。

沈みながら川に引き寄せる地盤の最大移動量は、4.3mに達するといわれます。それにより背後の地盤圧力で堤防が転倒する危険性があり、護岸破壊ケースも考えられ、1箇所でも切れるとなれば背丈くらいの水深で洪水のように河水が流れ込んでき、その際には奥戸新小岩地域が浸水することになると想定しています。

そこで質問します。中川七曲堤防が万が一地震での液状化による沈下崩壊が起こった際、堤防の機能が損なわれ地域に浸水した場合、堤防復旧など東京都との連携やどのような体制やマニュアルで対応されるのかお聞きしたい。スーパー堤防化などの堤防形態に変えるような働きかけを東京都にしていくべきでないかと思いますが、いかがでしょうか。

〈区長の答弁〉

スーパー堤防の整備は、治水のみならず地震対策、土地の有効利用、河川環境の向上等に大変有効であります。しかしながら用地買収を行わず街づくり事業と併せて実施されるため、長時間を要する事業であると考えております。

本区も、江戸川や中川で整備を進めておりますが、スーパー堤防の実現には、沿川で計画される大規模開発やまちづくり事業と一体的に整備される必要があります。引き続き、河川管理者である都との協議や情報交換を積極的に行ってまいりたい。

〈地域振興部長の答弁〉

河川管理者である東京都は、七曲堤防補強対策として昨年度から2カ年度で袋詰め根固工事を実施しております。

今後はテラス構造とし、河床の地盤改良を行い、地震に伴う液状化による堤防の崩壊を防ぐとともに、堤防全体をコンクリート被覆して侵食による崩壊を防ぐといった本格的な耐震護岸工事を実施する予定としております。

また、大震災等で万が一堤防崩壊が起こった際の堤防復旧などの体制につきましては、葛飾区地域防災計画に基づく本区の体制と同様に、河川管理者である都においても災害対策本部を置き、本区・消防団、また規模によっては自衛隊等とも連携を密にし、避難誘導や排水作業、堤防復旧などに対応してまいります。

万が一の避難空間として、高台に乏しい本区の地形から、大規模な集合住宅や商業施設の活用は、浸水時の避難場所としても適応するものであり、今後これらの施設管理者との防災協定の締結についても検討したいと考えております。



東京都議会予算特別委員会

・・・村上英子議員の質疑（平成18年3月）・・・

●河川の高潮防御施設について

〈村上委員の質問〉

ハリケーン・カトリーナの規模は昭和34年の伊勢湾台風と同程度といわれていますが、これくらいの台風が東京を襲わないとは限りません。東京にも地盤の低い東部低地帯があります。

東京の河川における高潮防御施設は、カトリーナのような台風に対しても安全なのでしょうか。

〈岩永建設局長の答弁〉

都は、伊勢湾台風と同規模の台風が東京を襲った場合の高潮に対処できるよう、防潮堤や水門などの整備を進めておりまして、東部低地帯の河川では、ほぼ完成しております。高潮に対する安全性は確保されていと考えております。

これまでの事例で申し上げますと、昭和24年のキティ台風では、東京で浸水家屋約14万戸と、戦後最大の高潮被害を引き起こしておりますが、これと同規模の高潮が平成13年、台風15号により発生しておりますけれども、被害は生じておりません。

なお、カトリーナとの比較で申し上げますと、この伊勢湾台風は、最低気圧、風速等ほぼ似通った状況でございまして、先ほどの伊勢湾台風と同規模ということで、安全性は確保されている、このように考えております。

〈村上委員の質問〉

これまで進めてきた高潮対策事業によって安全であるということが良く分かりました。

しかし、災害は思いがけないときに起こります。一昨年の新潟中越地震は、台風の直後に起こりました。また、逆も考えられるわけです。

そこで、河川における高潮防御施設の耐震対策について、今後の取り組みをお伺いいたします。

〈岩永建設局長の答弁〉

都は、都民が安心して暮らせるよう、隅田川や江東内部河川など延長約120キロを対象に、堤防や水門の耐震補強を進めてまいりました。

特に阪神・淡路大震災を契機といたしまして、整備が急がれる区間を平成9年度から計画的に進めておりまして、旧江戸川につきましては18年度までに、また、荒川と並行する中川の下流部につきましては平成20年度までに完成させます。

●被災者の救出手段について

〈村上委員の質問〉

今回のハリケーンでは、住宅などに取り残された多数の住民が、屋根から救助を求めるケースが多発しました。こうした場合の救出、救助には、ヘリコプターやボートによる救出が有効であると聞きました。

そこで、区部に零m地帯を抱える都として、万が一の浸水被害に備え、救出手段となる資器材や装備などの確保や運用体制はどのようにになっているのかお伺いします。

〈高橋総務局長の答弁〉

区部東部の零m地帯におきましては、浸水による被災者を救出、救助するために、警視庁及び東京消防庁は、救助用ボートを合計183艇、重点的に配備をしております。

またヘリコプターにつきましても合計21機を保有し、日頃から救出訓練等を行い、迅速な救助に備えております。

更に、水害発生時には、都の要請に基づき自衛隊も資器材を携行のうえ、出動する体制を整っております。

これらの運用に当りましては、都による警戒情報などの伝達と区市町村による住民の避難誘導、警察、消防、自衛隊による救助活動等を緊密に連携して行うことが重要でございます。

今後とも、関係機関と連携を強化して、浸水による被害から迅速に救出、救助が行えるよう体制を充実してまいります。

街づくりの活動を
やつこみませんか
—当NPOの会員募集中です—

☆正会員… 活動目的に賛同して入会する個人及び団体

☆賛助会員… 資金を提供してくれる個人及び団体

〈問い合わせ先〉

ア！ 安全・快適街づくり事務局
電話・FAX03-3696-7480

平成18年度総会終了 まずは新小岩公園のスーパー堤防化

—5月16日58名参加—

平成18年度の総会は、去る5月16日、葛飾区西新小岩の大成化工(株)会議室に会員以外の地元の方や関係官公庁の方も含め58名が参加し開催されました。

総会に先立ち、東京都港湾局の小林副参事から「ハリケーン・カテーリーナによる被害と東京港の高潮対策」と題する講演が行われました。

小林副参事は、災害発生直後に東京都の現地調査団の一員としてニューオリンズの被災状況を調査されました。

ニューオリーンズの被害は、人災的な側面が大きく、この災禍を他山の石として災害に備えたいと述べられました。

◇ ◇

総会の冒頭で石川理事長は次のように述べました。

- ☆ 公共工事予算の削減が続く中で、予算を獲得するためには、夢のあるプロジェクトの実現に向って地元の方々が熱心に働きかけることが必要です。
- ☆ 皆さんも地盤沈下したこの地を災害から守るために「現代の輪中」の建設を声を大にして訴えていかなければなりません。
- ☆ その第1歩として、今年度は地元の皆さんと一緒に新小岩公園をスーパー堤防化し、防災拠点とするため関係先に働きかけていきたい。

◇ ◇

引き続き17年度の活動報告に入り、江戸川区で開催したシンポジウムを昨年度の最大の成果とし、地元の皆さんに自分達はどんな処に住んでいるのか、万一地震等により破堤した時は、手近の何処に避難すべきかを常日頃から考えておくことの重要性を強く訴えることが出来た旨報告されました。

◇ ◇

- 決算については、次のような説明がなされました。
- ☆ 平成16年度に行われた「全国都市再生モデル調査」の受託金並びに外部機関への委託費用の発生が18年度にずれ込んだため、収支共に見かけ上の金額は大きなものとなった。
 - ☆ 寄付金予算が大幅未達であったため、各項目に涉る経費削減に努めたが17万円の赤字となった。18年度は、収支均衡を実現したい。

◇ ◇

18年度の活動方針では、次のような方針が提案されました。

☆ 葛飾・江戸川区民の避難場所の一つである新小岩公園をスーパー堤防化し、防災拠点とするよう地元の皆さんと共に区、都、国に働きかけることを活動の中心とする。

☆ このため前年のシンポジウムを契機に結成された江戸川区民の「中川堤防の安全を守る会」や新小岩地区南北連合町会の皆さんのが結成を準備中の「仮称新小岩公園をスーパー堤防化する会」の活動を支援していく。

◇ ◇

質疑応答では、水位表示板の設置計画について、荒川下流河川事務所への質問がありました。

出席された塚本沿川再開発課長から、17年度にハザードマップの完成している北区で試験的に洪水時の水位、避難先と避難経路を示す板を74箇所電柱に設置したこと、今後もハザードマップの出来た地区から設置していくとの回答がありました。

これに対し、葛飾・江戸川ではまだハザードマップが出来ていないが、とりあえず手近の避難場所を住民が常日頃から見つけておくためにも、洪水時の水位表示だけでも設置してほしいとの要望が出されました。

◇ ◇

前年度の事業報告及び決算、18年度の事業計画及び予算については満場一致で承認されました。

この後、現在の理事10名の重任に加えて新規に1名の理事を選任する議案が上程、可決され、3時50分終了しました。

総会終了後行われた簡素な会費制懇親会の席では、青山前副知事からの祝電披露に続いて、昨年度の活動に人的・物的に多大の貢献のあった法人会員(株)デックの表彰が行われました。

松田中部電力顧問による乾杯の発声の後、竹村リバーフロントセンター理事長を始めとする来賓の挨拶が続き、その中で野村東京都建設局河川部長から、道家建設局道路監の激励メッセージの披露がありました。

さらに、葛飾区の地元町会の方々からは、今年は当NPOと一体となって新小岩公園のスーパー堤防化の実現を目指していきたいとの決意表明があり、盛り上がりのうちに幕を閉じました。

発行

特定非営利活動法人

「ア！安全・快適街づくり」

〒124-8565

東京都葛飾区西新小岩3丁目5番1号

Tel・Fax 03-3696-7480

E-Mail tegami@banktown.or.jp

ホームページ <http://www.banktoen.or.jp>

